調査報告

ラオス仏教の現況
—Luang　Prabang地区について—

池　上　要　靖

はじめに

この調査報告は、筆者が2000年２月21日から同月２７日にかけて、LAOS国 Luang Prabang 地区の寺院の現況とその地域の経典の伝存状態などを調査することを目的として行ったものである.。

この調査は、当初、ラオスにおける Manuscripts の現存の有無を調べる予備調査のみに主眼を置いたため、ラオス仏教の日常生活までを描き出すには、充分な時間を割くことがかなわなかった。

調査をするに当たって Luang Prabang という町を選んだ理由は、第一にこの町がかつての Lan Xang 時代の王都であったこと、第二に周辺人口も含めて6.5万人ほどの規模しかないこと、第三に寺院が町の中心に密集しており至便であること、第四に住民の仏教信仰の形態が古い習慣を残していることなどである。

調査方法は、現地における聞き取り方法で、Palm Manuscript（以下、写本）の存在が確かめられた場合は、極力それをフィルムに納めるよう努めた。市井の骨董品店などでは、寺院ではなく、各家で格護されてきた Palm Leaf によるその家の縁起的な内容の資料が、古い家を建て替える際に、読まれることもなくなり、売りに出されている。しかし、仏教経典としての Palm Leaf は売られていない。寺院の中には写本経典が雑然と経箱（？）に容れられてい

るが、整理保存されているケースは皆無といってよい。[1] しかし、僧房（kuti）の各ピク（bhikkhu）は、Palm Leaf による写本を各々が伝持している。これは当然のことながら、師から弟子に、またはピクの死亡とともに分与され受け継がれてきたものである。今回はこのピク個人所蔵の写本を数点写真におさめることができた。

Luang Prabang には写本の図書館ともいえる Wat Paa Huak がある。しかし、現在この中の写本がどのようになっているかまでは、今回は確認できなかった。また、Wat Xieng Thong（「黄金の町」の意）などのような由緒ある寺院には三蔵を納める経蔵があるが、現存写本との関係について、今回は確認できなかった。以降の調査の課題である。

民族と歴史について

現在、我々がラオスが仏教国としてどのような歴史を持っているかを語るには、我々に届く情報量の少なさから、認識の度合いはあまりに低いといえるだろう。ここでは Laos という国としての歴史を概観し、仏教信仰が根付いた時期を確認する。[2]

国名：ラオス人民民主共和国（Lao People's Democratic Republic）

人口：521万1800人（2000年5月現在）

面積：236,800㎢（日本の本州とほぼ同じ）

位置：北緯15度54分（マニラとほぼ同じ）～22度30分（台湾南部の高雄や香港にほぼ同じ）東経100度～107度

民族：低地ラオ人（ラオ・ルム）人口の70%、一般的にラオ人とはこの人々を指す。タイ語系諸語。

丘陵地ラオ人（ラオ・トゥン）先住系民族，人口の20%、オーストロアジア語を話す。

高地ラオ人（ラオ・スーン）人口の10%、高地に住む新しい中国系移

住者。ミャオ・ヤオ語を話す。

部族数は68に及ぶ。

宗教：全人口の60％が仏教徒、特に低地ラオ人の90％は上座仏教を信仰している。他にアニミズム信仰と呪術、キリスト教が信仰されている。

歴史：祖先はタイ人と同じく、中国南部（発祥はアルタイ山脈の麓？）に住んでいた。13世紀の初頭、元（1271～1368）軍に追われて南下し、メコン川に沿って下った者達がラオ人となり、メナム川を下った人々がタイ人となった。以下、歴史については Stuart-Fox、Simms、IEB から概観する。

1353年 メコン川のサワー（現在のルアン・パバーン）に形成されたシェントーン（Xieng Thong）を基礎にファー・グム（Fa Ngum）がラーンサーン（Lan Xang「百万象」の意）王国を建国。この頃、パバーン仏像とともに上座仏教が伝わる。

1500年頃　ウィスーン（Visoun）王即位。新寺院の建立などがなされ、ヴェトナムの侵攻後の国家作りが顕著。

1520年 ポーティサーラート（Photisarath）王即位。仏教信仰と国勢が最も盛んとなる。王は、スリランカのマハーヴィーハーラ（大寺）派の中心地であったチェンマイから経典を招来した。

1550年 セーターティラート（Setthathirath）王即位。この王の時代、ラーンサーン王国とランナー王国とを一人の王が統治した。

1558年　王はヴィエンチャンに遷都、チェンマイからエメラルド仏像を招来する。ラーンサーン王国を象徴する仏像となり、信仰を集める。

1707年　ラーンサーン王国がヴィエンチャン王国とルアンパバーン王国に分裂。

1713年　チャンパーサック王国がヴィエンチャン王国から独立。

1778年　シャム軍の侵攻により、エメラルド仏像がトンブリーへ持ち去ら

れる。

1893年　フランス植民地時代（1949年まで）。

1945年　3月日本軍が進駐。5ヶ月間のみの統治となるが、この間に名目上ではあるが独立宣言を発する。

1947年　憲法により、仏教が国教と定められる。

1954年　7月ジュネーブ会議で完全独立と統一を国際的に保障される。

1959年　サンガ勅令１６０号が公布され、教団の組織が規定される。

1960年代　政情不安とクーデターが相次ぎ、左派のパテト・ラオ（Pathet Lao「ラオス愛国戦線」）と米軍支援の右派（当時のプーマ首相の現有勢力側）との争いが顕著となる。

1971年　アメリカ軍ラオス侵攻。ヴェトナム戦争の一地方戦線と位置づけられる。

1973年　パテト・ラオがヴィエンチャンを包囲、ラオス民族連合政府を樹立。

1975年　王政を廃止し、ラオス人民民主共和国成立。（人民革命党＝共産党政権）ただちにラオス南部に強い勢力を持っていたタイ系のタマユット派を禁教とし、反面サンガから6名を全国人民代表者会議の議員として任命する。 同年、革命政府により仏教弾圧を行う。（托鉢の禁止など）しかし、民衆の強い反発によりこの処置を解き、以後、仏教教団を政府の統制下におき積極的に利用し民衆の先導をさせようとしている。

1989年　ラオス人民革命党第4回党大会にて、「ラオス仏教連盟規則」改正案２２条が採択される。

統計的な数字から分かることは、人口増加が激しいことである。現在の人口は上記のとおりだが、現在のラオス政府が統計をとり始めた1976年頃から比較

すると1,7倍ほどになる。およそ４年後の2005年には間違いなく統計当初からの２倍になっているだろう。[3] しかし、仏教を信仰する人口は必ずしもそれに比例してはいない。都市部での若者の宗教離れが、顕著になりつつあり、ラオス政府の共産主義教育が功を奏していると考えられる。

また、ラオス国内には民族ごとに相容れない闘争があることも事実である。ヴェトナム戦争時に共産側に組した現政府勢力の低地ラオ人を中心とするものと、アメリカ側に組した丘陵ラオ人とは、未だ充分な和解がなされていない。最近の首都ヴィエンチャンや北部山岳地帯での爆弾テロ事件などは、共産主義政権樹立の際にアメリカに亡命した人々の関与が取りざたされている。[4]

歴史的な変遷を辿ると、１４世紀にスリランカ大寺派の上座仏教が移入され、今日まで人々の篤い信仰を得てきた、という言葉に総括されるだろうが、もう少し詳しく顧みるならば、大きく３点に集約されよう。第１には、仏教移入前の民間信仰との関わりである。上座仏教はそれまでの民間信仰である精霊信仰を否定しなかったが、認めることもしなかった。1520年に即位したポーティサーラート王は、その精霊信仰と仏教の混交を許さず、精霊信仰を禁止した。人々の信仰形態は精霊に肉や魚、果実、穀物などの供犠をして、精霊を鎮めることに努めるものであったが、仏教側の解釈では、精霊は仏陀の教えに帰依したので供犠から精進の供養へと変わり、精霊もそれを受け入れると説明した。結果的には、精霊を祀ることにかわりはなく、精霊と仏教との関係を明らかにした点で、精霊信仰が仏教的信仰形態の枠組みに捉えなおされたといえるだろう。[5]

第２に、ラオス仏教を象徴する信仰形態に、特定の仏像に対する崇拝があげられる。ルアンパバーンにおいては、パバーン（Pabang）仏像、ヴィエンチャン遷都後はプラケオ（Pha Kaew 俗に「エメラルド」）仏像である。いずれの仏像も王の肝いりで招来されたものだが、プラケオ仏像は、現在タイのバンコックにある。パバーン仏像はこれを祀るために、ルアンパバーンの王宮博物館内に新しい宮殿が造営されている。これらの仏像に対する思い入れは、歴史的価

値観からではなく、信仰、それも仏教に留まらず、民族の象徴としての意味を内包した尊崇である。通常のWatにある仏像ではなく、この2体の仏像のみに抱く特殊な感情といえるだろう。

第3には、1975年、新政府誕生後の仏教の変化であるが、これについては以下に述べる。

現在の仏教とサンガ組織

ラオスの仏教サンガの機構に対して、現在の政府が樹立され、全国人民代表者会議が召集されるや否や6名の bhikkhu が議員として招かれたことからもわかるように、現政府が仏教サンガに介入し、これをコントロールしようとしている向きもある。[(6)] しかし、現実として現政府はラオス仏教サンガの頂点にある「ラオス仏教連盟」の発言を非常に重要視していることも事実であり、各寺院の諸事に関する事柄でラオス仏教連盟のお墨付きがあるか否かで、政府の決定を大きく左右している。現在の政府とラオス仏教連盟を図示すると、次のようになる。

Lao PDR → ラオス仏教連盟（Ongkan Phutthasasana Samphanhaeng Pathet Lao）

情報文化省　　1,723寺

教育省

全国サンガ代表者会議（1989年2月開催）

中央委員会

（中央常任委員9名、名誉中央委員4名、中央委員42名）

|

各州、県、郡のワット管理委員会

（身分証明書の発行、いわゆる「戸籍」にあたる）

|

ピク（bhikkhu）7,293人、ネーン（sāmanera、二十歳未満）9,093人、他に在家修行者（白衣を着る）

このような組織のもと1986年に採択された「ラオス仏教連盟規則」は、全22条であり、次の２点に特徴が見出せる。①には、義務として「経」と「律」を学習すること、②には、人民を教育して国家の発展に寄与すること、が挙げられる。このなかで②に見られるような内容は本来の上座仏教では考えられないことであった。革命後の新政府の干渉により、出家として世に超然たる立場をとることを否定されたことになる。たとえば、隣国タイでは農村部の bhikkhu が自ら進んで村民と交わり村の開発に携ってゆく「開発僧」の事例が報告されているが、ラオスの bhikkhu 達にこのような事例の報告はなく、山間部のどのような寺院であっても、村民の中に bhikkhu が入り込むようなことはないといって差し支えないだろう。(7) さらに、王国下の慣習では、男子であれば成人するまでに一度は出家し仏門に入ることが義務化されていたが、現在ではそれも無くなっている。地方の農村などでは、バースコントロールの意識が低く、子供は労働資源でもある。しかし、一家の中での口減らしの意味もあり、出家させられ寺に預けられる子供は少なくない。食事と教育が与えられるからである。現在は政府が出家の年齢制限を設けている点も注目される。10歳以上でなければネーンとして仏門に入ることが禁止されている。従来、小学校の絶対数の不足から、ラオスでは初等教育は寺院においてなされるシステムが大きな比重を占めていたが、近年小学校の建設が増えつつあり、５・４・３制の学校教育の礎ができつつある。ヴィエンチャンなどの都市部では、こうした傾向を受

けて、寺院を媒介とせずに教育を受けてきた裕福な若者層を中心に、仏教から乖離する傾向が近年顕著であり、布施の集まる WAT（寺院）は裕福であるとの認識を抱いている。

ラオス仏教の布施と功徳の関係は、施与者→（布施）→出家者（福田）→功徳の果報→後生善処、という上座仏教として当然あるべき形から、施与者→（布施）→出家者→（教育）→在家者→国家の繁栄（出家者の国家寄与）、という構造へ変換しようとしている。いわゆる出家者が民衆の中に入り、国家を第一義として、共に「救済」されようとする方向へ向かおうとしている。これはラオスの仏教が、「大乗」的方向へ政治的に改変されようとしていると指摘する向きもある[8]。現政府の政治理念は共産主義であり、この点から国家の総てを掌握しようとするならば、ラオスの仏教を「大乗」的に改変しようとする動きではなく、共産主義の理念をサンガの内部に植え込もうとする動きが当たり前と言える。ラオス仏教の形態は確かに変わりつつあるが、それは何の理念を第一義として捉えるかが重要であり、具体的な改変を強く望んでいるとは言い難い。ラオス仏教の重要な儀礼（たとえば Vientiane の That Luang の大塔祭など）では政府の要人の出席もあり、ラオスの政府とサンガとの関係は双方の微妙なパワーバランスの上に成り立っていると見られる。

今回の調査における仏教経典写本について

調査地域　：　LUANGPRABANG 州 LUANGPRABANG
（ラオス第二の町、人口約65,000人、古代王国時代の首都、町並みが1995年にユネスコ世界遺産に登録される）

調査対象　：　LUANGPRABANG 寺院、特に前回訪問時に、写本を管見することのできた２ヶ寺。（WAT XIANG THONG, WAT THAT LUANG ）

調査期間　：　24～27 ／ 02 ／ 2000

調査内容　：　WAT XIENG THONG

写真撮影　写本①：Jātaka（10物語中4,5,6），Palm-leaf,
57.5×4.6cm，57葉，
所持者 Poen Mi Thero.

写本②：Pāṭimokkha，paper，25×9.6cm，
Private ed. pub.1995. pp.1～144，
タテ開き、所持者 Poen Mi Thero.

写本③：Pāṭimokkha，paper，35.6×12cm，
Royal ed. pub.1956. pp.1～153，
タテ開き、所持者 Mao Mahā Thero.
（Xieng Thongの住持[9]）

WAT THAT LUANG LUANG PRABANG

写真撮影　写本④：Visuddhi nya, Palm-leaf, 60×5.5cm
60葉　寺院蔵。

写本⑤：Visuddhi nya, Palm-leaf, 52×5cm
58葉　寺院蔵。

写本⑥：Visuddhi nya, Palm-leaf, 58.5×5cm
46葉　寺院蔵。

写本⑦：Khunboulom, Palm-leaf, 58×4.5cm
24葉　寺院蔵。

今回の Luang Prabang において調査しフィルムに納めることのできた写本類は上記のとおりである。写本①は bhikkhu の個人所有しているものであり、綿布にまかれた10組の sutta が確認された。この sutta は jātaka であり、ラオスでもっともポピュラーな sutta であった。この10組の jātaka はそれぞれが１つの物語となっている。それは次の通りである。1, Temiyakumāra

2, Janakakumāra　3, Suvaṇṇasāma　4, Nimirājā　5, Mahosadha　6, Bhūri-datta　7, Candakumāra　8, Naradabrahma　9, Vidhurapaṇḍita　10, Vessantara。今回はこのうち 4，5，6 についてフィルムにおさめることができた。これらのポピュラーな10の jātaka の他に、次にしめす50の jātaka 群がよく知られている。[10]

1, Samuddaghosakumāra　2, Suddammakumāra or Sutarājākumāra
3, Sudhanakumāra　4, Sirasākumāra　5, Subhamittarājā
6, Sunaṇṇasaṅkha　7, Candaghaṭaka　8, Suvaṇṇamigā　9, Suvaṇṇakuruṅga
10, Setamūsika　11, Tulakapaṇḍita　12, Maghamanava
13, Ariṭṭhakumāra　14, Atanapajjota　15, Sunandakumāra
16, Bārāṇasī　17, Dhammadharapaṇḍita　18, Dukkammakumāra
19, Sabbasiddhikumāra　20, Pann(paṇṇ)abalakumāra　21, Dadhivahana
22, Mahisakumāra　23, Chaddanta　24, Campeyyanagarājā
25, Bahalagavi　26, Kapila　27, Narajīvakumāra　28, Siddhisarakumāra
29, Kusarājā　30, Jeṭṭhakumāra　31, Duṭṭarājakumāra　32, Vaṭṭakarājā
33, Narada　34, Mahāsutasoma　35, Mahābalarājā　36, BrahmaghosarāJā
37, Sadirājā　38, Siridharaseṭṭhi　39, Matuposaka or Ajitarājā
40, Vimalarājā　41, Arindumarājā　42, Viriyapaṇḍita　43, Adittarājā or Adiṭṭhārājā　44, Surūparājā　45, Suvaṇṇabrahmadattarājā
46, Mahāpadumakumāra　47, Surāsenarājā　48, Siricundamaṇirājā
49, Kapirājā　50, Kukkura

写本②と③は刊本である。出版事情の悪い環境下では、bhikkhu達 はこのような出版物を大事にしている。写本②は篤信の寄進者が500部作成したものであり、私本である。校訂は写本③の持ち主である Mao Thero であり、師は Luang Prabang において Pāṭimokkha を暗誦する3人の Mahā Thero の一人である。（今回 Pāṭimokkha の暗誦をビデオにおさめる機会も得た。）

現在のラオスで出版された Pāṭimokkha としては、一番新しいものである。写本③は、王室のパトロゲイトにより Buddhajayanti にあたる1956年に出版された唯一の公式な Pāṭimokkhaであり、刊本としてはこの②と③の２種を数えるだけである。

写本④・⑤・⑥は形態こそ違え、その内容から Visuddhimagga と同様であろうと思われるが、慣用表現などで必ずしも一致しないことから、ここでは言及を避けて他の機会に譲らせていただきたい。

写本⑦は Laos 建国の物語であり、16世紀に綴られたクンブロム王伝説のことである。現在、増補などにより５種の版があることが知られているが、これがその中のどれに属するかは、未だ確認できない。

まとめ

今回の現地調査は、Laos 仏教の現状というフィールドと、写本の伝存調査という、異なった方法を持ちいなければならない調査を短期間で行うという欲張ったものとなり、どちらも中途半端で終わってしまったことは否めない。今後の反省材料である。

現状という点から総括すると、ラオスの政府と仏教連盟とは70年代の情勢ほどではないにしろ、現在も微妙な綱引きの状態にある、と言えよう。しかし、そのような中にあって情報文化省貝葉保全局長のダラー女史（Darakamrayak）のバックアップにより Pha Luang Mahā Sena 原著になる２分冊の Pāli 語テキストが1994年に作成出版され、ネーン達に難しく敬遠されがちであった Pāli 語の教育に一石を投じている。このような点からも、政府と連盟の公式の立場ではなく、末端のレヴェルでは両者の理解は深まっていると見られる。今後は、公の立場からの関係があくまで続くか、現実レヴェルでの相互理解による尊重が深まるか、今後の展開が注視される。

貝葉写本の整理、研究はまだ緒についたばかりといえる。寺院に残された古

い貝葉は情報文化省の貝葉保全局によって徐々にではあるが蒐集、整理が進められている。そのような写本と流布本のような形式で bhikkhu の所有になる新しい貝葉写本との内容の比較検討などはまったくなされていない。このジュレンマは柏原論文にもみられる傾向である。ラオス仏教のPāliは文字だけではなく、発音や文法もスタンダードな Pāli とは言い難い。この点を克服しながら、ラオス所伝の sutta や Pāṭimokkhaの照合を進めてゆきたい。

参考文献と略号

・綾部&石井　綾部恒夫・石井米雄編『もっと知りたいラオス』弘文堂、平成10年。

・泉　泉　経武「タイ“開発僧”評価の動向—「セーキヤタム・グループ」と「セーキヤタム・カレッジ」—」パーリ学仏教文化学、第14号、2000年。

・柏原　柏原信行「ラオスの貝葉」パーリ学仏教文化学、第10号、1997年。

・Bapat　P. V. Bapat ed. “2500 Years of Buddhism”, New Delhi, 1987.

・Cummings　Joe Cummings, “ Laos”, Lonely Planet pub., 1998.

・IEB　Nagendra Kr. Singh ed. “International Encyclopedia of Buddhism”, vol.47, New Delhi, 1998, pp.1～128.

・NSC 1　“The Households of Lao PDR”, National Statistical Centre, 1999.

・NSC 2　“1975-2000 Basic Statistics of The Lao PDR”, National Statistical Centre, 2000.

・Stuart-Fox　Martin Stuart-Fox, “A History of LAOS”, Cambridge University press, 1997.

・Simms　Peter and Sanda Simms, " The Kingdoms of Laos, Six Hundred Years of History", Curzon press, 1999.

注

① ラオスに現存する写本の最古は、約550年前に作成されたと考えられている。1990年代になるとラオスの情報文化省の貝葉保全局長であるダラー女史（Darakamrayak）を中心として、写本の現存状態を調べるプロジェクトが続いている。事実、筆者が滞在していた期間にも以下のような新聞記事が掲載された。
VIENTIANE TIMES　FUB.25／2000　"4 century-old palm manuscript discovered",
'A 386 year old palm-leaf manuscript titled Mongkouthipance was found at SaMei villege, Vapee district ; and another aged 314 years titled Visaka was found at Thamaugse village, Saravan district. They turned up during a search in four districts in Saravan province by the Lao-German Palm Manuscript Conservation project in December, reported Pasason on February 23. During the 50-day investigation, 11,313 palm-leaf manuscripts were registered in 64 temples. They included 92 stories. 699 manuscripts were bad condition, though all, including the two ancient ones discovered, were well kept. The aim of the project is to prolong the life of the ancient palm manuscripts.'
このような調査によって現在知られている写本類の束は、おおよそ２０万点強ほどであり、その内容は必ずしも経典だけではなく、法律や伝承、縁起なども含まれる。

② Lao語のアルファベット表記には、チベット語と同じように、それぞれの専門家が独自の表記方法を用いている。フランス語的表記や、Pali に根ざした表記や、発音に忠実であろうとする表記など一定したものはない。ここでは歴史的語彙の豊富さから基本を Simms の表記により、その中で得られないものは Cummings によった。Pali や現代発音にもっとも忠実であろうとするものはStuart-Foxのものであるが表記が煩雑となるためここではもちいなかった。

③ NSC２の資料 pp.18～19による。1976年から５年毎に2000年まで調査された人口の推移が示してある。

④ 筆者が Vientiane、Luang Prabang において行った聞き取り調査で対象者２０名がそれぞれ同じ指摘を示した。対象者の内訳は男14名、女６名で、いずれも成人で

ある。識字率は100%、全員低地ラオ出身であり、Vientiane では8名（男4、女4）、Luang Prabang では12名（男10、女2）であった。

⑤ 綾部&石井 p.117。

⑥ 綾部&石井 p.125。

⑦ 泉。タイ開発僧の現況と今後の課題をレポートしている。この泉論文中にあらわれるような bhikkhu の積極性を Laos の bhikkhu 達に見ることはできない。

⑧ 綾部&石井 pp.126～8。

⑨ Poen Mi Thero は2000年12月に赴任した寺院で亡くなり、Wat Xieng Thong の住持であった Mao Mahā Theroも85歳で2001年1月に亡くなられた。紙面を借りてご冥福をお祈りします。

⑩ このリストは Mao Mahā Thero へのインタヴューによるものだが、この内容は Bapat の pp.378～379と一致した。Mao Mahā Thero の発音で聞き取りづらいものは、Bapat によった。また、Bapat では jātaka の他のバージョンと比べた場合27のストーリィーを見出せないと言う。この詳細は Henri Deydier, 'Introduction a la Connaissance du Laos.', Saigon, 1952.にあるというが筆者は未見である。